「鼻が高い」考

小野正弘

一、問題の所在

現代語において、「鼻が高い」という表現は、文字通り〈鼻梁が高い〉という意味の他に、〈得意な様子。自慢げな様子〉を意味する。このとき、「鼻が高い」は、どのようなことを言い表しているのだろうか。ひとつの考えかたとしては、**図1**に示したように、鼻そのものが高くなる、というものがある。しかし、これは、厳密には、「鼻が長い」というべきなのではないか。「高い」というのは、〈注意の焦点と基準との上下の距りが問題〉になるものなので（國廣哲彌一九八二、一五八頁）、**図1**のような、〈前後〉の方向に、「高い」を用いるのは、

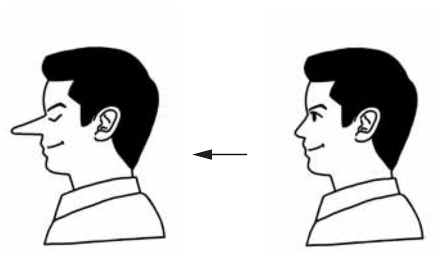


図1

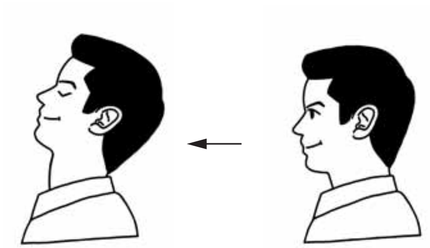


図2

若干違和感を覚える。[1] また、もっと根本的な問題として、鼻そのものが、現実的に伸長することなど、ありえない。[2]

「鼻が高い」の、もうひとつの考えかたとして、**図2**に示したような、顔面全体を上のほうに振り仰いだことによって、[3] 鼻梁の頂点の位置が、より高い位置に移動して、結果的に、「鼻が高い」という状況になる、というものがある。この考えかたによれば、「高い」を使用することの問題はなくなる。また、鼻が伸長するなどという、非現実的な想定をしないで済む。が、これも、厳密には、「鼻が高い」というよりは、「鼻が高くなる」という表現に対応するものではないか、とも思われる。また、このような動作であることが分かるような表現が、文献上に存するのかということも問題となる。

そこで、本稿では、「鼻が高い」という表現、ならびに、それに関連する用例が、どの時期に、どのように現われるかを整理し、前記の問題についても、いずれが妥当かを考察する。

二、「鼻が高い」とその類例

〈得意な様子。自慢げな様子〉の意味での「鼻が高い」という用例は、『日本国語大辞典』第二版によれば、『色道大鏡』（一六七八）が冒頭の例となっている。そこで、近世以降における、[4]「鼻が高い」と、それに類する用例が、どの資料で、どのように現われているかを整理したものが、次々頁の表である。[5]

表の見方であるが、まず、縦軸に、資料名と、そのおおよその目安としての成立年代を示した。[6] このとき、噺本大系と洒落本大成に含まれる資料については、資料名のあとに「噺」「洒」を付した。

次に、横軸に、「鼻」と共起する表現を配した。「大き系」とは、形容動詞「大きなり」と形容詞「大きい」をまとめたもの、「高系」とは、「高し」と「高い」をまとめたものであり、単独の場合（「い／し」）、「なる」と共起する（「高くなる」のように）場合、「する」と共起する（「高くす」のように）場合、その他の「高」の場合（「鼻高」「鼻高々」等）とに、細区分した。さらに、「高慢」「天狗」と共起した場合、その他、〈得意な様子。自慢げな様子〉を表わすと思われる表現のある場合とに区分した。なお、ここで「共起」とは、述語や連体修飾等、構文上の関係性を有する場合を主として指すが、広く、近似した文脈に現われる場合も指すことにする。

各資料における用例数を、表中に記したが、〈得意な様子。自慢げな様子〉を意味する例の数を、(1)のように、括弧内に入れて示した。なお、これは内数であり、「1」のあとに「(1)」のようにあれば、1例中1例が、〈得意な様子。自慢げな様子〉を意味していることを表わす。これは、たとえば、「鼻が高い」とあれば、常に、〈得意な様子。自慢げな様子〉を意味するわけではなく、文字通りの〈鼻梁が高い〉を意味する場合があるためである。

まず、表の全体を瞥見する。「大き系」は、近世初期に現われるが、中期以降にも現われ続けている。「高系」の単独例「い／し」も、近世全体に亘って見え、文字通りの〈鼻梁が高い〉と〈得意な様子。自慢げな様子〉とが、共存する。「高系」が「なる」と共起する場合は、単独例に比べて、例は少ないものの、ときおり現われる。これも、文字通りの〈鼻梁が高い〉と〈得意な様子。自慢げな様子〉とが、共存する点に特徴がある。一方、「高系」が、「する」と共起する場合は、近世前半期に集中して現われ、すべて、〈得意な様子。自慢げな様子〉を意味するところに特徴がある。また、表では「他」として一括したが、「鼻高」「鼻高々」等の、「高」の派生形も、〈得意な様子。自慢げな様子〉を意味して、ときおり現われる。「鼻」と「高慢」が共起する場合とは、「高慢の鼻」のような場合であるが、このような場合は、常に、〈得意な様子。自慢げな様子〉を意味することになる。「鼻」が、「天狗」と共起する例も、近世の全期に亘って現われるが、これは、のちに詳しくみるように、実際の「天狗」について述べ立てられることが多く、〈得意な様子。自慢げな様子〉として使用される場合は、むしろ少ない。また、その他、「鼻」と共起する表現が、いくつか見出されるが、これらもまた、〈得意な様子。自慢げな様子〉の意味を表わすことは少ない。

以下、それぞれの表現別に、意味・用法・出現等の特徴を、具体的に述べていくことにする。なお、引用に当たっては、引用テキストの旧漢字を新漢字に改める、適宜、振り仮名を省略する等の手当てをしている。また、用例が存在する頁、行を表わしたところで、*8とは、後から数えて8行目の意である。

【a．大き系】

「鼻」と、「大き系（大きなり・大きい）」の表現が共起する、近世初期の例としては、

資料名	年代	大き系	高系				高慢	天狗	他
			い／し	なる	する	他			
きのふはけふの物語・噺	1624	1							1
虎明本狂言集	1642	1	1						1
わらいくさ・噺	1656	1							
百物語・噺	1659			3					
狂歌咄・噺	1672		1						
色道大鏡	1678			1 (1)					
囃物語・噺	1680		1					1	
好色一代女	1686		1						
好色五人女	1686		2						
西鶴織留	1694		1					1	
初音草噺大鑑・噺	1698							1	
露新軽口はなし・噺	1698							1 (1)	
夕霧阿波鳴門	1712		1 (1)						
水打花・噺	1716				1 (1)				
咲顔福の門・噺	1732				1 (1)				
仮名手本忠臣蔵	1748								1
跖婦伝・洒	1749					1 (1)	1		
言灰楽言花論談・洒	1754					1 (1)			1
禁現大福帳・洒	1755		1				1		2
江戸評判娘揃・洒	1769		1 (1)						
鎌倉三代記	1770					1 (1)			
恋道双陸占・洒	1771						1		
艶占奥義抄・洒	1771		1 (1)						
軽口大黒柱・噺	1773			1					
口拍子・噺	1773				1 (1)				
出頬題・噺	1773					1 (1)	1		
仕形噺・噺	1773								2
風流睟談義・洒	1774		1						
茶のこもち・噺	1774					1 (1)		1	
立春噺大集・噺	1776						1		
高わらひ・噺	1776							2	
夕涼新話集・噺	1776					3 (2)			
雨月物語	1776				1 (1)				
高慢斎行脚日記	1776		1	1 (1)			1	1	
蝶夫婦・噺	1777		1					1	
郭中掃除雑編・洒	1777		1 (1)						
世説新語茶・噺	1777		1 (1)						
万の宝・噺	1780							1	1
笑長者・噺	1780				1 (1)				
多荷論・洒	1780	1							
大通俗一騎夜行・洒	1780		1					1	
いかのぼり・噺	1781							1	
廓遊唐人之寐言・洒	1782				3 (3)				
鯉池全盛噺・洒	1782		1 (1)						

資料名	年代	大き系	高系				高慢	天狗	他
			い／し	なる	する	他			
蛇蛻青大通・洒	1782		1 (1)						
徒然睟が川・洒	1782	1							
夜明烏・噺	1783							1	
福茶釜・噺	1783								1
卯地臭意・洒	1783						1		
彙軌本紀・洒	1784								
うぐひす笛・噺	1789							1	
通気粋語伝・洒	1789	1							
破紙子・洒	1790		1 (1)						
振鷺亭噺日記・噺	1791		2 (1)						
吉美談語・噺	1796		1					1	
雅興春の行衛・噺	1796		1				1		
即当笑合・噺	1796	1							
裸百貫・洒	1796	1							
巳入吉原井の種・噺	1797		1						
戯言浮世瓢単・洒	1797			1 (1)					
無事志有意・噺	1798		1						
阿蘭陀鏡・洒	1798		2						
辰巳婦言・洒	1798						1		
新製欣々雅話・噺	1799		1						
粋学問・洒	1799		1 (1)						
野暮枝折・洒	1799						1		
身体山吹色・洒	1799					1 (1)			
廓写絵・洒	1801		1						
面美知之狸・洒	1801							1	
善玉先生大通論・洒	1801			4 (1)	3 (2)	1			
遊倦窟烟之花・洒	1802		1 (1)						
起承転合・洒	1802		1 (1)						
指南車・洒	1803						1		
嘘之川・洒	1804		1						
しみのすみか物語・噺	1805	1							
野圃の玉子・洒	1805		1						
当世廓中掃除・洒	1806	1							
画ばなし当時梅・噺	1810		1					1	
椿説弓張月	1811		2						
浮世風呂	1813		1			1			
廓宇久為寿・洒	1818				1 (1)				
春興噺万歳・噺	1822								1
小倉百首類題話・噺	1823			1 (1)		1 (1)			
落噺屠蘇喜言・噺	1824						1		
七福神落噺・噺	1829				1 (1)				
粋好伝夢枕・洒	1829							1	
潮来婦志・洒	1830		1 (1)					1	
花廼志満台	1836		1						
小袖曾我薊色縫	1858		1						

＃1　女ばう聞て、其事じや、世上に申ならはし候は、おとこのはなの、大きなるは、かならず、かの物か大きなるといふが、そなたのはなは大きなれとも、かのやつはちいさい、これかふしんじや。
（『きのふはけふの物語』上、一六二四、噺本大系1・一五八上10）

＃2　（大名）「鼻が又大きなは　（今参）「かうりやうばなで候もの　（大名）「口が又ひろいは　（大名）「鰐口で候もの（虎明本狂言集「今まいり」、一六四二、池田／北原・上二〇五―8）

のような例があり、＃1に見られるように、鼻の大きさと、陰茎の大きさとが連想関係になることがあるのも特徴である。「鼻」について、「大き系」の述語が共起することは、中世ごろから例が見え、

＃3　豊後の国司刑部卿頼資卿はきはめて鼻の大（おほき）におはしければ、かう［鼻豊後］とはの給ひけり。
（『平家物語』八・太宰府落、古典大系33・一三三―5）

などが、その例であるが、これは、平時忠が、豊後国司小松頼資を「鼻豊後」と呼んだことについての注釈に当たる部分である。なお、後述する、「鼻」と「高し」が共起する例も、中古から例があるので、「大き系」と「高系」は、共存していたことになる。このとき、「大き系」が、鼻全体の姿やボリュームについて言及されるものなのに対して、「高系」は、鼻梁の高さ、つまり、顔面と鼻の頂上との差について言及されるという担い分けがあったものと考えられる。それは、

＃4　これも今は昔、奈良に、蔵人得業恵印といふ僧ありけり。鼻大きにて、赤かりければ、「大鼻の蔵人得業」といひけるを、（『宇治拾遺物語』十一・六、新編全集50・三四三―*8）

のように、「鼻」が「大きにて」のあとに、「赤かりければ」という、鼻全体の特徴が描写されていることからも推測できる。が、鼻そのものの、大きさや高さについての表現・語彙の総合的な歴史については、また稿を改めて論ずることにしたい。

鼻の見た目の大きさについての関心や言及は、一般的

なものと考えられるので、近世後期においても見出せるが、次の例、

#5　婦(おんな)、男の鼻の大きひを見て、戯けて曰く、尓のその鼻では、物(かのもの)もさぞ大きからふ。(『即当笑合』不準、一七九六、噺本大系19・5下*8)

#6　江州辺の大百姓の後家と見へて。年頃は四十余りの大女房。是迄数十人の養漢おゐても〳〵、もの一月と勤る物なく。元より給銀は望次第芸能器量の望もなく。唯達者一むきで鼻の大ながあらばとの事。(『裸百貫』四、一七九六、洒落本大成16・二八八下*6)

などは、やはり、#1で見たような、艶笑譚的な含意が見てとれる。#6は、芸事も容貌も望まないが、ただ壮健であり、鼻が大きいことが望まれているのである。また、「大き」を形容動詞として用いる場合(#5)と、形容詞として用いる場合(#6)が共存していることも、注目される。

【b.「高」系】

(1)「高し／い」単独の場合

まず、「鼻」と「高し／い」が単独で共起する場合を見る。前述したように、この場合、文字通りの〈鼻梁が高い〉の意味と、〈得意な様子。自慢げな様子〉の意味が共存している。表を見るかぎりでは、近世初期のころは、〈鼻梁が高い〉意味のほうが連続しているように見える。このとき、

#7　昔山口源五右衛門とかやいひし人有。生れつき鼻の高き事、天狗は物かはなり。香(かう)を嗅(きく)事名人にて、大名高家にかぎらず、伽羅(きやら)を求る人々は、此源五右を頼み、(『囃物語』上―四、一六八〇、噺本大系4・53上6)

のように、「鼻の高」いことが、「天狗」を意識したものとして捉えられていることが注目される。前述したように、鼻について、「高し／い」を用いて描き出すことは、古くからあり、有名なところだと、『源氏物語』末摘花の、

#8　あなかたはと見ゆるものは鼻なりけり。ふと目ぞとまる。普賢菩薩の乗物とおぼゆ。あさましう高うのびらかに、先の方すこし垂れりて色づきたること、ことのほかにうたてあり。（新編全集20・二九二―*4）

の描写が存在する。つまり、鼻を「高し」と表現することは、古来より存するのである。(7)

さて、「鼻」と「高し／い」が単独で共起する場合で、文字通りの〈鼻梁が高い〉という意味で用いられる例は、近世全般に亘って観察され、

#9　此家内を七日がうちに一人ものこさず取ころさん」といふ声の下より、鼻高く兒（かほ）赤く眼ひかり、住吉の御はらひの先へ渡る形のごとく（『好色五人女』二・踊はくづれ桶夜更て化物、一六八六、古典大系47・二四四―7）

#10　さつと吹来る辻風に誘れ、遥にちり行高山の巓（いたゞき）、これわとばかり茫然としている所へ、鼻の高いわろがによつこり。（『雅興春の行衛』三―くら天狗、一七九六、噺本大系13・四六下*2）

#11　爰を以ていふ時は幸四郎か鼻高きとて羨むべからす四郎五郎か鼻ひくしとて賎しむへからす高きもあれば低きるあるは下駄屋の見せ先なるべし（『廓写絵』、一八〇一、洒落本大成19・二五三下*6）

#12　まづその人を見るに、年紀（としのころ）は、十六七にして、筋骨逞しく、面（おもて）白く鼻高く、眉は緑にして青山のごとく、脣は紅にして春花のごとく（『椿説弓張月』前・二・第四回、古典大系60・一一〇―6）

などの例が見える。#9は猿田彦、#10・11・12は人間の例（ただし、#12は、源為朝の描写で、やや異相）である。

「鼻」と「高し／い」が単独で共起する場合で、〈得意な様子。自慢げな様子〉の意味を持つものは、

#13　お袋ぶって鼻高うお家をありたいまゝにして。奥様を踏みつけるは今（いんま）のこと。（『夕霧阿波鳴門』中、一七一二、古典大系49・二〇二―10）

#14　人を、べらぼふのやうにをもふていさんすゆへあまり鼻がたかふありんすそれじゃからよそでは

よくいひやせん（『艶占奥義抄』大吉、一七七一、洒落本大成5・一九二上2）

#15　女郎の誠を見る事は。江戸自慢の鼻高き。山吹色の勢なるべし。（『世説新語茶』、一七七七、洒落本大成7、二三七下2）

#16　おたがい長左ヱ門暑中お見まいコフツいっそ夜具をしてやろう仮宅の内床が出来ちゃあ女良衆も鼻が高かろう（『遊倦窟烟之花』三、一八〇二、洒落本大成19・一一四上4）

などである。#13〜16、すべて人間の例である。#13は、夕霧に対する女中たちによる悪口なのであるが、「鼻高う」は、単なる〈得意な様子。自慢げな様子〉というよりは、〈高慢な様子〉とまで言ってよい例と考えられる。#14も、同様に、「よそからではよく言」わない程のものとなっている。すなわち、「鼻高し／い」には、〈得意な様子。自慢げな様子〉が過剰であるというニュアンスがありうることには注意しておく必要がある。

(2)　「高くなる」の場合

「鼻」と「高くなる」が、共起した場合も、前記(1)と同様、文字通りの〈鼻梁が伸長する〉場合と、〈得意がる。自慢する〉場合とがある。前者の例、

#17　此つゞみ一方をうてばはな高くなる、一方をうてばもとのごとくになる、名を天狗つゞみといふなり、（『百物語』下・二十、一六五九、噺本大系1・二四三下*5）

の場合は、「天狗つづみ」という不思議な鼓の力で、鼻が自在に伸びたり縮んだりするという話なのであるが、もとより、架空のことがら、想像上のことがらである。ただし、それが、「天狗」と関連付けられていることは、注目に値する。また、次の例、

#18　まれ〳〵彼地に入来る客を一人とらへては、右往左往にとり付もてはやす故に、此客鼻たかくなりて、あれはいや、これはいやとしたるはあしし。（『色道大鏡』十五、一六七八、完本色道大鏡・四八〇—4）

は、本節冒頭で言及した、『日本国語大辞典』第二版に

おける、「鼻が高い」が〈得意がる。自慢する〉を意味する冒頭例なのであるが、この例は、厳密に言うと、「鼻が高くなる」の例である。また、この例も、客をあまりにもてはやす待遇をしたために、客のほうが得意のあまり、わがままになってしまうのは悪いことだとして、〈得意がる。自慢する〉程度が過剰であると判断されていることにも、注意したい。さらに、

#19　物ごとめつたやたらに自まん、頭がちを云ならべ、廿日斗して後、寝ていたるに、鼻の尖ぽか〳〵ほめき出しけり。是はと手をやりみれば、はな五寸ばかりのびて高くなる。（『軽口大黒柱』五―新参天狗、一七七三、噺本大系9・五五上11）

の例は、架空の鼻が伸長したものなのであるが、その背景に、「めつたやたらに自まん」したことが示されている。

(3)　「高くする」の場合

「鼻」と「高くする」が共起した場合は、構文的には「鼻を高くする」と、ヲ格による接続になり、意味的には、〈得意がる。自慢する〉だけになる。つまり、文字通りの〈鼻梁を隆起させる〉の意味にはならない。また、次の、

#20　今井なにがしとかやいへる浪人、江戸へ下るとて、江州粟津の兼平が石塔をみて、下人にいふやう、おれが先祖の兼平のせきとうは是じや。おれもおがむほどにわれもそこでおがめと、かんたんくだき、はいしければ、ふしぎや、石塔ぶる〳〵とふるひけり。浪人鼻をたかくして、（『水打花』三―石塔の奇瑞、一七一六、噺本大系7、二九〇下*6）

の例は、今井某が、今井兼平の石塔を拝んだところ、石塔が振動したことで、奇瑞が起こったと得意になっていたのに、実は、単なる地震が起こっただけであったという落ちになる話である。これは、〈得意がる。自慢する〉ことが、過剰であったことが含意されている。さらに、

#21　此法師請(むか)へてん」とて、あはたゝしく呼つげるに、漸(やゝ)して来りぬ。しかしかのよしを語れば、此

法師鼻を高くして、「これらの蠱物（まじもの）らを捉（とら）んは何の難き事にもあらじ。必静まりおはせ」とやすげにいふに（『雨月物語』四・蛇性の淫、一七七六、古典大系56、一一八―4）

#22　ほねふとくたくましき男ゆへ、やとのていしゆ、しこみのよひをほめる。杣（そま）、鼻を高くして、国にもわしらアほどなものはござんない。（『笑長者』杣の自慢、一七八〇、噺本大系11・三〇九下*1）

#23　おまへ様が来て下さつたので、まあ相談もさつそくにへまして、うれしうござりますと、大ひによろこべば、作者も少し鼻高ふして、（『小倉百首類題話』梅―中納言行平、一八二三、噺本大系15・二一三下*1）

などの例も、#21は、当初、大蛇退治など簡単だと、自慢そうに請け負っていた法師の描写で、のちに、大蛇に怯えて気絶するというもの、#22も、少しほめられたぐらいでいい気になって自慢する杣人の描写、#23は、まんざらでもない、自慢の気持ちが表わされているものである。つまり、〈得意がる。自慢する〉ことは、むしろ過剰なことであるという位置づけになっているものが、目に付く（ただし、#23は、そこまでの過剰を意識してはいないかもしれない）。とすれば、これらは、〈高慢な様子〉とまで言ってよいものと考えられる。

ところで、この「鼻を高くする」という表現をどう考えるべきであろうか。ひとつの考えかたとして、これこそが、第1節**図2**に示したようなしぐさに対応するという考えかたがある。「鼻が高くなる」のときには、実際に鼻が伸長していたとしても、架空の世界の話であった。が、この「鼻を高くする」の場合、そのしぐさをする様子が描かれているのは、等身大の人間なのである。そう考えると、この「鼻を高くする」は、自慢らしく、胸を張ったり、腰を反らせたりしつつ、顔面を上向きにするしぐさと対応することで、鼻の頂点の位置が上に移動することを表わしうる。(8)

が、一方では、この「鼻を高くする」は、仮想世界（ヴァーチャルリアリティー）でのことであって、現実のしぐさと対応しているわけではない、という考えかたもあろう。「顔に泥を塗る」「へそで茶を沸かす」「後ろ脚で砂をかける」など、現実の行動・しぐさとは対応しなくても、その表現を聞くと、どのようなことが行なわれているかを想起できる表現は多くある。(9)これもそのひ

とつだとする考えかたである。
この、前者、後者、いずれが妥当かと考えようとしても、現実の姿を見ることができない以上、これ以上はなんとも言えない。が、そうはいっても、ここでは、前者の可能性も否定できないことをを提示して、大方のご教示を俟ちたいと思う。

(4) その他、「高」の派生形の場合

「鼻」と「高」の派生形が共起した場合で、今回、多くの例が得られなかったものを、次に示しておく。

#24 ハイ〳〵といかめしく。挑燈照らし入来るは。武蔵守高師直。権威を顕(あら)はす鼻高々。(『仮名手本忠臣蔵』三、一七四八、古典大系51、三〇三―14)

#25 ながめつめいる所を、子供どもが見て、アレ、鼻高見いやい。ゑらいものしやナアといふたら、手綱の手で、まへおさへた(『夕涼新話集』五―真田股野、一七七六、噺本大系10・三一六下6)

#26 役者の鼻は人並より少し高みな方が見能(い)い容(かたち)だネ(『浮世風呂』三・下、一八一三、新古典大系86、一九六―1)

#24は、「鼻高々」の例であり、「権威を顕はす」とあるから、胸を反り返したしぐさと結びつくと考えられる。それは、結果として、鼻の頂点が上方に移動することにもなる。そして、その姿は〈高慢な様子〉でもある。#25は、「鼻高」の例で、現実的に、鼻梁が隆起している容貌を描写するものである(ただし、「まえおさへた」とあるので、#1・5・6で見たような、艶笑譚的要素を含むものと考えられる)。#26の「鼻―高み」も、現実的な鼻梁の隆起を指し示しているものである。

三、「高慢」「天狗」との共起

前節までで、「鼻」が、「高系」と共起する場合、文字通りの〈鼻梁が隆起している様子〉を意味する場合と、〈得意げな様子。自慢げな様子〉を意味する場合とがあり、後者の場合は、それが過剰であることを含意することが目に付き、それは、さらに〈高慢な様子〉と解釈できて、さらに、その背後に、「天狗」のイメージが見出せることが分かってきた。

そこで、本節では、「鼻」が「高慢」ならびに「天狗」と共起する場合を検討していくことにしたい。なお、ここでの「共起」とは、二節の始めにも述べたように、構文論的な関係性を有するものだけでなく、広く、近接する文脈に現われる場合をも含むことにする。

【a.「高慢」】

「鼻」が、「高慢」と共起する場合は、

#27　我と我手に身をあがりたかぶり。いつも我身分をまだ是位といふ事は無い筈じやがと。不足に思ふ高慢が鼻の尖へ出る（『恋道双陸占』畳六、一七七一、洒落本大成5・一五九下3）

#28　近所付合も出来ぬ程の高慢人、ある人と段〳〵噺しをして、又例の物知りじまんを鼻へ出して、（『立春噺大集』二―自慢顔、一七七六、噺本大系10・二五二上7）

#29　わが輩おのれがいさゝか得たる芸に誇(ほこり)たま〳〵、われよりまへめな者をみると高慢の鼻をいからし耳に盗し故事を口に吐(はき)ひろく識(しり)たるを売て甚しくこれを語るそれ故世の人天狗と仇名をつけて憎みさげしみ（『野暮枝折』四、一七九九、洒落本大成18・26上9）

#30　適(たま)〳〵天性の幸を受て容顔うるはしく生得しを我智恵顔に高慢の鼻の先にふらつかせ南(あつた)の駅に通ふといへとも己惚(うぬぼれ)の広言にお亀も終に愛相をつかし（『指南車』第一回、一八〇三、洒落本大成22・二七二上6）

のようなものであり、その実はさほどでもないにも拘わらず、我と我が身を驕り高ぶる、高慢な様子は、鼻の先に現われる（#27・28・30）ものであり、誰かが自分よりも少し先を行こうとするなら、鼻を怒らせて（#29）攻撃するほどであり、その姿は、天狗とあだ名して憎みさげすまれるものである（#29）、ということが見てとれる。そして、ここにも、高慢の象徴として、「天狗」が現われていることに注目したい。

高慢な様子が、鼻の先に現われるということは、

#31　［碁盤のうえで逆立ちをしようとして］、牛の［碁盤乗りの］かるわざ見るやうに、どふやらかふやら仕おほせ、いつかど太平な顔して鼻をひこ

つかしてゐられけるが、（『軽口五色帋』中―軽業の稽古、一七七四、噺本大系10・一三下*5）

に見られるように、鼻を「ひこつかせる」、すなわち、鼻をうごめかすというような場合もあろうし（この例は、表で言うと、「他」に該当する）、#24のように、自慢げに胸を反り返らせることによって、鼻の頂点が上向きになる姿を示す、という場合も考えられよう。

【b.「天狗」】

次に、「鼻」が「天狗」と共起する例について見ていくと、

#32 「家主（いへぬし）の内義の鼻は人にすぐれて、阿太子山（あたご）の天狗の媒鳥（おとり）に見立た」と、（『西鶴織留』四・家主殿の鼻ばしら、一六九四、古典大系48・三九七―14）

#33 とくほういんとて、かど〳〵はらいに行かげにて、はじめて大峯へ入て、にはかに鼻が天ぐ殿にあやかり、おごりいで、嶋原の北むきに五分ばかり取、見よしと中女と少なじみしに、（『露新軽口はなし』一―九、一六九八、噺本大系6・一九八上10）

#34 ム、、てんぐさまはどんな物だ。マア鼻が高いは。口ばしがながくてはねがあつて、鳶のよふな物さ。（『古美談語』天狗、一七九六、噺本大系13・九上*4）

#35 是をのしこし山におへる松茸に聞かさは、たちところに挑灯と変し、山水天狗の高き鼻も、たちまちにひしけぬへし。（『画ばなし当時梅』序、一八一〇、噺本大系19・三七上10）

というようになっていて、#33は「おごりいで」とあって、高慢な様子と結びつき、#35は、「高き鼻もひしけぬ」とあって、自慢げな様子だったものがつぶれてしまうと述べられている（ちなみに、#35も、艶笑譚的内容）。「鼻」と「天狗」が共起する場合、やはり、自慢、高慢と結びつくことが見てとれた。

が、一方、#32や#34のように、単なる天狗の姿形の特徴、とりわけ、鼻の高さに注目したものも目に付き、今回採取した用例で言えば、むしろ、そちらのほうが多いくらいである。これは、採取した用例が、多く、噺本

からのものであることが、その一因かとも考えられる。嘶本においては、天狗は、人界からかけはなれた想像上の異類というよりは、場合によっては、廓にさえ出没し、笑いを提供するひとつのキャラクターとして立ちあらわれるのであり、その場合は、むしろ、天狗としての容姿そのものが、注目点となるので、文字通りの〈鼻梁が高い様子〉の意味になるのである。(10)

四、「鼻が高い」と「天狗」

〈得意な様子。自慢げな様子〉を意味する「鼻が高い」と、それに類する表現が、「天狗」と結びつくことが分かってきた。これらが、どういう関係にあるのかを、整理してみたい。

その際、天狗がどのようなものとして捉えられてきたかが、重要なポイントとなる。それについては、これまでの研究の蓄積があり、たとえば、知切光歳（一九七五）によれば、隆鼻した天狗の像が造型されたのは、室町末、狩野元信の「鞍馬大僧正坊図」が初めてであり、「この隆鼻の大天狗こそ、日本ではじめて創造された姿である」という（一八〇頁）。

すなわち、そもそも、「天狗」とは、『日本書紀』に記された「彗星」の記事に端を発し、それが、空を飛ぶイヌ（狗）またはキツネのように理解されたのがはじまりであった。「天狗」という語そのものは、中国に典拠のあるものであるが、日本で、独自の変容が行なわれ、一種の魔怪としても捉えられつつ、山岳信仰とも結びついて、行者のようなイメージも帯び、さらには、鼻の尖ったカラス天狗のような姿としても受け容れられていった（知切光歳［一九七三］）。

それが、前述のように、隆起した鼻を持つイメージとして造型されたわけであるが、重要なのは、それが室町時代末であることと、天狗には、〈高慢〉という属性が分かちがたく結びついていたことである。

すでに見たように、「鼻」の隆起の程度が大きい様子を「高し」を用いて表現することは、古代からあった。しかし、「鼻」と「高し／い」を結びつけて〈得意な様子。自慢げな様子〉を表わすようになったのは、近世以降である。そうすると、時期的に見て、そこに、天狗のイメージが関与した可能性は高いのではないかと考えられる。実際、それは、〈得意な様子。自慢げな様子〉を意味する「鼻が高い（鼻高し）」が用いられるとき、天

狗についての言及が多く行なわれていることからも裏付けられる。

　また、天狗の〈高慢〉という属性は、「鼻が高い（鼻高し）」が、単なる〈得意な様子。自慢げな様子〉ではなく、ときに、その過剰なまでの様子を意味することにつながっていた。

　図示すると、次のようになる。

	中古・中世		近世
鼻	大きなり：〈鼻全体が大きい様子〉		
	高し：〈鼻梁が隆起している様子〉	← 意味変化	
		〈得意げな様子。自慢げな様子〉	
		→ 影響	
			天狗の鼻の隆起・高慢の属性

　ところで、冒頭に紹介した、鈴木（一九六七）では、天狗の鼻はなぜ「高い」というかということに関して、次のような論述の展開を行なっている。すなわち、天狗の鼻は、「長い」とも言いうるのに、「高い」というのは、そもそも、人間の鼻について「高い」というからであって、それを適用しているからである。また、日本人にとって、「鼻は出ていればいるほど良いものだという価値判断がある」ので、「望ましい隆起である鼻の突出度を形容することばとしては「高い」が実にぴったりである。「高い」は権威、崇高、尊厳、など精神の高揚を暗示することばである」とする。そして、「人間の鼻をこのような見地から高いと言うことになれば、人間の持っていない各種の神力をそなえた天狗を、極度に鼻の高いものとして心にえがくことは、さほど不思議ではなくなる」としている。

　が、これらの議論は、天狗の画像造型の歴史、ならびに、天狗に〈高慢〉の属性があることを考慮せず、日本人が鼻は高ければ高いほどよいと考えているという前提に立っている（末摘花の鼻の高さは、光源氏からは「あさましう」と捉えられた）等、問題があろう。

　また、前田金五郎（一九八〇）は、近世に「鼻は人の面の山」という諺が行なわれていたことを伝えていて、興味深い。そもそもは、『世説新語』に見えるというから、中国南北朝の南朝宋にまでさかのぼる。鼻を山のアナロジーで捉えることは、そう特別なことではないよう

にも思えるが、鈴木（一九六七）によれば、世界の言語で、山の高さに使う形容詞を鼻にも使うことは「殆ど不可能」で（high mountain とは言えるが、high nose とは言えない）あるが、「面白いことに中国語では「鼻（ビー）は高（カオ）いと言える」とされる。「鼻高し」が、漢文的な発想を受容したものだったとすれば、確かに「面白い」が、このことについては後考を俟ちたい。

五、まとめと今後の課題

これまで述べてきたことを、箇条書きにまとめる。

○「鼻」については、古代から、「大き系」と「高系」の言いかたが行なわれてきたが、「高系」は、近世にいたって、それまでの文字通りの意味〈鼻梁が高い様子〉から、あらたに、〈得意な様子。自慢げな様子〉を意味するようになった。

○新しい意味〈得意な様子。自慢げな様子〉は、ときに、それが過剰であること、すなわち、〈高慢な様子〉をも含意した。

○〈得意な様子。自慢げな様子〉が過剰であることは、天狗の〈高慢〉という属性と結びついていた。

○近世における「鼻」と「高系」の共起による意味変化は、中世末期における、天狗のイメージの変容と、強く結びついていたことが考えられる。

次に、今後の課題を述べる。まず、近世の次の、近代における「鼻が高い」が、どのような展開を見せるかを確認する必要がある。現代語において、「鼻が高い」は、特にマイナスのイメージでは捉えられない。したがって、近代における「鼻が高い」が、どのように用いられているのかを記述することは、必要でもあり、価値のあることでもある。また、「鼻が高い」の類例である、「鼻高」や「鼻高々」などの展開も、確認しておく必要がある。特に、「鼻高々」は、むしろ、否定的なニュアンスを帯びがちであるようにも思われるので、そこを、細かく追求しておくことが必要となる。また、近世以前の「鼻」をめぐる表現が、どのようであったかを跡づけておくことも必要となる。なお、務めたい。

注

（1）ただし、顔面を仰向けた状態にして、それと鼻梁の最高点を問題にすれば、「高い」が使える。が、それでは、なぜ、仰向けるのかという点について、説明が必要にな

ろう。人間の鼻について「高い」を用いることとの理由については、鈴木孝夫（一九六七）に論があるが、四節でとりあげる。

（2）芥川龍之介の「鼻」を思い浮かべることはできるが、あの小説は、もとより、フィクションである。なお、現代では、「鼻が高い」しぐさとして、握りこぶしを、鼻のさきに付けるという姿を目にすることがある。

（3）このとき、胸や腰を反らすなどの身体的動作も付随しうる。

（4）国立国語研究所の「日本語歴史コーパス（ＣＨＪ）」の検索によれば、「鼻」が「高い」と共起した例は、中古以降の例が検索できるが、近世以前の意味は、文字通り〈鼻梁が高い〉という意味のものである。

（5）なお、この表は、「鼻が高い」と、それに類する用例に限ったものであり、各資料における「鼻」全体の数を表出しているものではないことを、予め、断わっておきたい。

（6）成立年代の設定は、各資料の刊記、底本とした本の解説における推定を参考にした。また、『浮世風呂』等のように、成立が複数年に亘るものは、その下限を示した。

（7）そういう点で言えば、注(1)に引いた、鈴木（一九六七）が、鼻をなぜ「高い」と言うかということに関して、現代語の語感からのみ述べているのは、若干、もの足りない感じがする。また、永野賢（一九六九）には、末摘花の鼻について言及している箇所がある（六九頁）。

（8）杉原たく哉（二〇〇七）でも、「天狗のそうした特徴［中途半端な居丈高］は、顔の鼻高と結びつき、増長して自慢げにすることを「鼻高々」という表現にもなる。もちろん、威張って顎を上げれば、鼻の位置も当然上がって高くなることも関係しているだろう。」（一一〇頁）と指摘されている。

（9）現実には行なわれないのに、ある表現を聞くことで、ある出来事が想起されるということでいうと、これは、金水敏（二〇〇三）の「役割語」に近い概念なのかもしれない。従来は、「慣用句」と、一括りにされてきたものであるが、それも含めて再構築の可能性もあることを指摘しておきたい。

（10）今回、「鼻が高い」に関連した表現は、仮名草子、浮世草子、黄表紙、滑稽本などよりも、噺本・洒落本に多く見出されるという特徴があり、その意味では、噺本・洒落本を広く調査する意義が見出せたのではあるが、一方では、その資料の内容に基づくバイアスは、避けられないものとなっているのであろう。

参考文献

金水　敏（二〇〇三）『ヴァーチャル日本語　役割語の謎』、岩波書店
國廣　哲彌（一九八二）『意味論の方法』、大修館書店
杉原たく哉（二〇〇七）『天狗はどこから来たか』、大修館書店

鈴木　孝夫（一九六七）「天狗の鼻はナゼ高い」、『言語生活』一九一
知切（ちぎり）　光歳（一九七三）『天狗考　上巻』、涛書房
――（一九七五）『天狗の研究』、大陸書房
永野　賢（一九六九）『にっぽん語風俗学』、明治書院
前田金五郎（一九八〇）「ことばの散歩道(5)――やさしい、鼻は人の面の山、ばいてぎ、ほか」、『文学』48―2

【付記】

挿画は、本学二〇一一年卒業（国語学ゼミ）の堀川千晶氏に依頼したものである。また、本学文学部日本文学専攻の牧野淳司教授より、天狗に関する文献の教示ならびに図書の貸与を受けた。ともに記して感謝の意を表したい。